

本城を目指し白雪を紅に染めた

## 札幌一中の雪戦会

明治から昭和にかけて多くの市民が熱狂した、冬の風物詩「札幌一中の雪戦会」を紹介します。

雪戦会の原型は、札幌一中（現在の札幌南高）の前々身にあたる私立北鳴<sup>ほくめい</sup>学校で始まった雪中の旗取り合戦であるといわれています。その後、ルールなどの形式を整えて、明治三十年（一八九七年）に第一回を開催。ほどなく札幌の冬を代表する行事として定着していきました。

雪戦会に欠かせないもの。それは、ブロック状の雪を積み重ねてつくる「本城」です。当日に向けて、まず全校生徒は南、北軍に分かれ、城づくりに取りかかります。この本城、初めのころは、饅頭<sup>まんじゅう</sup>のような形をしていましたが、やがて高さ六層、底径五層の円柱型に定まりました。それから生徒たちは容易に登れない城をつくろうと工夫を重ね、その努力の成果か、一人も登城できずに終了した年もあったそうです。

本城が完成すると、いよいよ雪戦の始まりです。進軍ラッパの合図とともに、両軍は敵陣の本城を目指します。守備軍は選り抜きの猛者が本城を囲み、対する攻撃軍は、相手の守りを排し、スクラムを組むようにして足がかりをつくり、本城を登ります。両者の攻防は「白雪を紅に染めて」と形容されるほど、壮絶なものだったといえます。

そんな生徒たちの姿は、厳寒の札幌で否応なしに忍耐を強いられている市民にとつて、冬を乗り越える活気の源となっていたのでしょうか。訪れる市民の数は何千、何万ともいわれ、雪戦会を見ることなく満員の会場を後にする人の行列は、学校があつた



落城間近の本城（大正14年）  
「九十年写真集（北海道札幌南高等学校）」より



雪戦会と会場に詰めかけた観客（昭和5年）  
「百年史（北海道札幌南高等学校）」より

北一〇条から南一条まで続いたという記録も残されています。また、明治三十九年（一九〇六年）には、ロンドンタイムズ紙が雪戦会の様子を報道するなど、その熱狂ぶりは海を越えて紹介されました。

大正に入ると、けがをする生徒が続出したため、一時は存続も危ぶまりましたが、市民からの人気は相変わらず。昭和三年に故秩父宮が、四年には故高松宮が、来道の際に雪戦会をご覧になり、生徒は「雪戦会が世界の名物となるよう努めよう」と盛り上がりました。

しかし、第二次世界大戦の影響で開催が困難になり、二十年、第四十六回で雪戦会は幕を閉じました。その後、四十七年に雪上運動会と名称を改めて復活し、平成三年まで行われました。

（平成十二年二月号・第六十五回）